輪廻

福壱柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
輪廻

【Ｎコード】
Ｎ０４１１Ｄ

【作者名】
福壱柚

【あらすじ】
私立中学に通う苗は一見、成績優秀の友達の多い子に見えるが・・・

プロローグ

十二月三十一日
町中が幸福で溢れかえるその日に

私は死んだ

いや、正確には、殺された

母は私の死体を見て嘆いて
まだ三歳の妹は、泣きじゃくり
頭が少し薄くなった父は唖然とするだろう

だって、家族には私が、何故死ななければいけないのかが
分からないのだから

地元でも有数の私立中学にみごと受かり
その、中学ではいつもトップの成績を誇っていて
我が校の誇りだと、校長に直々に言われた

ずっといい子で育ってきた子がまさか自分で命を立つなんて
親の身になってみれば、理解不能なことだ

私は目の前にある自分の骸に呼びかけた

「もう、楽になっていいんだよ・・・自分」

第一話　始まり

目を開けると、目の前には闇が続いていた
右も左も、下も上も分からない

「佐崎苗様ですよね」

突然名前を呼ばれた。振り返ると、ホウっと明かりに照らされた蛇がにゅるりと地面らしき所にいた

「・・・へっ蛇がしゃべった・・・」
「ハァ、何故に人間と言うものは私たち共みたいな動物が喋ると、驚くのでしょうか」

くたりと蛇の首が垂れる
何なんだこの蛇は・・・
私は手の平で自分の頬っぺたを抓った

「痛い・・」
「当たり前田のクラッカーです」
「・・・・・何それ」
「知らないのですか？」

私は考える。いままで生きてきた中で（まぁもう死んでいるけど）
そんな言葉あったのか
多分私の言葉の辞書には書いていないだろう

「・・・これはもう現代では死語ですか・・・」

ふぅ、とまた蛇はため息をついた

「つい、三十年前までは流行語だったのに・・・」

「あのー・・いいですか？」

蛇はちらっと私を見て言った

「あぁ。そういえば忘れていました」

するりと蛇は私に近づいてきた

びくっと体を震わせると、大丈夫とやさしい声で言ってきた

「佐崎苗様。このたびは六道案内ツアーをご利用ありがとうございます」

はぁ？と私が小さく声をもらす

大体この蛇は一体なんなんだ？

「貴方様は一時間前自ら命を絶たれましたね」

「まぁ、一応」

「こちらでは、えーと、迷える魂とでもいいましょうか、そう言う魂の方は天国には行かず輪廻の世界に行かれるんです」

「・・・りんね？」

首をひねると蛇はうなった

「うーんと、ようするに、地獄よりももっとひどい世界に行かれるんです」

自殺すると地獄に行くと思っていた私は蛇の話を聞いてぞっとして、

火の中を永遠に走り回っている人の想像をした

「あっ・・・そんなひどい世界じゃありませんよ」

「ただもう一度生き返るだけですから」

「せっかく死んだのに?!」

冗談じゃない、こっちは痛い思いして死んだのに

心の中で叫んだ

「そういう運命なんです、と言うか、自業自得ってやつです」

「そんなぁー・・・・・」

がくっと私は肩を落とす

それを見たのか、蛇は慌てて付け加えた

「と、ごくまれに貴方様のような魂の方のために、案内人の私共がいるんです」

「・・・はぁ」

「申し遅れました、私、蛇の屍≪しかばね≫と言います。以後おみしりおきを」

くにゃりと首を下げる

蛇に頭を下げられていると思うと変な気分になった

蛇がふっと後ろを向いた、何かを確認しているみたいで、あぁそうだなとか、ちょっと手間取っているとか（私のこと?）ぶつぶつ言っている

その間私は話を整理した

一つ目、私は六道輪廻と言うわけのわからん世界に来たこと
二つ目は、そこで私はもう一度生きかえらなくちゃいけないと言うこと
三つ目は、その、案内人は変な蛇の屍と言うやつだっていうこと

「ハァ・・・」

自然とため息がでる
いくら頭の良い私だってこんな状況テストに出ても分からない

「苗様、そろそろ本題に移らせてもらってよろしいでしょうか」
「はい、どうぞ」

ゴホンっと屍は咳払いをする

「今から貴方様に六つの冥界。地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道の中の人間道の世界に行ってもらいます」
「どんな所？」
「ついさっきまで貴方様がいた世界です」

ほっとした。少なくても火の中を追いかけられることはないだろう

「やることは簡単です。貴方様はその世界で、真実を洗いざらい見てきて下さい」

さらりと屍は言う

「どうやって？」

「貴方様が見たいと思った相手に近づき、手を握って下さい。あぁ、大丈夫です、相手には見えませんし、触られている感覚もありません」

なにせ死んでますからとにこやかに言った
以外とつめたい蛇だなと、私は思った

「それでは行ってよろしいですか？」
「は？いや、駄目。大体、真実ってどういうこと？」
「どういうことと言われても・・それは自分自身で考えて下さい」

この駄目蛇めと小さく声を漏らした

「それでは行きますね」
「えっ・・・ちょっと」

待ってといい終わらないうちにふわりと体（魂かな？）が浮いていった

「わわわ・・・」
「大丈夫です、怖いのならば目をつむっていて下さい。今からもっとおぞましい世界が見えますから」

屍に言われ、慌てて目を閉じた
ぎゅんっと衝撃が大きくなったと思えば、辺りに血の香りが漂った
手で鼻をつまむといくらか楽になったが、鼻に血の香りがこびりついて吐き気がした
段々ぎゅんぎゅんと進むスピードも衰えはじめ
最後にポムっと音がしたかと思えば、ぶわっと爽やかな風が顔にかかった

「苗様。目をあけても大丈夫ですよ」

おそるおそる目を開ける

そこには、つい先ほどまで居た町並みが広がっていた

第二話　過ぎ去る日々

「屍・・・・」
「なんですか？」

目の前の光景に唖然とする

「なんで、こんなに住宅地が広がってるの？」
「あぁ、それは苗様がいた時から一年たった世界だからです」

そう言われれば分かる気がする。
でも、たった一年たっただけで、こんなに変わるとは正直驚いた

「なんで一年たってるの？」
「企業秘密です。」

そう言って屍は何かを隠すようにそっぽを向いた。
やっぱこの蛇ケチだな。と私は再確認した。

「苗様。最初に会う人はもうこちらの方で決まっているのですが良いですか？」

くるりと私の方を向いて、にゅるりと長く赤い舌を出して屍は言う。

「・・・別にいいけど」

そういう大事なことは最初に言ってほしい。
当の本人は、蛇ながらも涼しい顔をして行き先を告げた

「森拓那(もりたくな)？」
「そうです。今から苗様には森様に会っう・・・と言うか触りに行きます」
「その言い方なんか変態みたいじゃん」
「この言い方が一番適切かと思い言ったのですが」
「・・・・・あっそ」
「そうです」

あれ？私は頭の中で疑問をもった。

森拓那って誰？
名前はかろうじて覚えているけど、顔や思い出などは一切思い出せない。
これもすべて死んだから？！
記憶力だけが自慢だったのに・・・・・

「屍、私森拓那なんて知らないよ」
「そりゃぁそうですよ。私がちょこっと苗様の記憶をいじくりましたから」

私の頭に？マークが浮かぶ
それを見て屍はつけたした

「ようするに、記憶を消したんです。名前以外はね」

めんどくさいんですよ、思い出があると。と屍はつぶやいた

「そういうことは、早めに言ってよ・・・」
「言ったら記憶消してくれないじゃないですか」

屍が言うことは一理ある。
もしも仮にそう言われたら、私は断っていただろう

「それにつらいですし・・・思い出は・・」
「いや・・・消されたから分かんないって」

哀れみの目で見る屍にかるくツッコミを入れる。
すると、屍はケロリと立ち直ってニュルニュルとアスファルトの上

を歩いていく。

「ちょっと、どこ行くの？」

私に聞かれてイラッときたのか、後ろを振り向かずに、めんどくさそうに言った

「森様の所です！！」

いきなり進まないでよと、文句を言おうと思ったがやめた
ニュルニュルと進む屍に私はだまってついてゆくことにした。

「ねぇ。屍」
「なんですか」
「私と森拓那ってどうゆう関係だったの？」

うーん、と屍はうなると渋々言った

「・・・・まぁいわゆるアベックですかね」
「あべっく？なぁにそれ」
「・・・・・・これも死語ですか」
「だから、あべっくってなに？」
「分からないのですか？」

「分かる」
「なら聞かないでください。めんどうくさい」
「だって沈黙がイヤなんだもん」
「そうなんですか」
「そうなんですよ」

ふぅっと屍はため息をついて
記憶も性格もめんどうくさい人だなぁ。と普通の人なら聞こえない大きさで言った

「しつれいなッ」
「聞こえてたんですか」
「どーせ地獄耳だとおもってるでしょ？」
「いえ。すさまじい執着心のもちぬしだなぁと思いました。そんなに私の一人ごとが気になるのですか？」
「・・・・・・別に」
「じゃぁ聞かないで下さい」

ぴしゃりと屍に言われてだまりこむ。
しばらくすると、屍は公園の前で止まった

「やまぼうし公園？」
「ここに森様はいます」
「なんで？」
「さぁ、それは苗様が聞いてみてください」

しれっとして答えられて私は少しむっときた。

「ほら、見て下さい。あれが森拓那様です」

屍な指（首）をさす方向を見ると、ブランコに乗っている一人の男がいた

「行ってください」
「触るだけでいいの？」

そうですよと、屍はめんどくさそうに答えた。

「あぁ、言い忘れていましたが、あぶなくなったら私を呼んでください」
「はい？」
「まぁ、行ってみれば分かりますよ」

ぐいぐいと背中を屍の頭で押され。男が座っているブランコの前まできた。

ドクンと心臓が意味もなく跳ね上がる
呼吸が乱れ、ふいに森拓那という少年に近づきたくなくなってきた

一歩

二歩

三歩

「それでは、いってらっしゃいませ。苗様」

屍の言葉と同時に私は森拓那に触った。
つめたくて、さみしい手
拓那を見ていると、なぜだか切なくなる。

私は静かに目をつぶった。すると、心の奥から森拓那の記憶が溢れてきた

第三話　底なし沼

記憶の中に入る感覚を例えれば。
冷たく、しずかな海に入る感じ。
記憶の奥の奥に入るほど冷たく
記憶のはじめにあるほうが暖かい

屍は公園に来る前に言っていた
私が森拓那の記憶に入れば、おのずと森拓那に関係する記憶が戻ってくる。と・・・・

私は息を大きくすった。
冷たい空気が肺に染みる。
しばらく森拓那の記憶をさまよっていると、声が聞こえてきた

『ホントウは・・・・・・』
（なに？この声）
『ホントウは・・・・・・』

（森拓那の心の声？！）

『苗のこと嫌いじゃなかった』

びくんッと体が跳ねる。
カタカタと体が小刻みに揺れ始めて

最初の記憶が流れてきた
私の中の森拓那に関する記憶が・・・・・

拓那に告白されたのは私が死ぬ一年前。
正直。クラスでとても人気のあった拓那が、私のことを好きだなんて最初は嘘だと思っていた。

だから、私も好きでもないくせに付き合った。
優越感。そんな感覚で・・・

最初の半年は順調にものごとがすすんでいた。
拓那との関係も壊れてないし、クラスの関係も壊れていない。
無論。その時も私は拓那のことが好きじゃなかった。
と言うか、好きになってはいけない。そう自分の中で決め付けていた。

拓那は私と付き合っているのは、遊び。
だから本気で好きのなって、あとで別れられたらつらいから
だから拓那を好きにならない。

第四話　底なし沼

一方の拓那はいつも私の側にいてくれた。
最初は少し抵抗があったけど、段々日がたっていくうちに、抵抗しなくなった。

拓那の笑顔
拓那の横顔
拓那のクセ

私の中の拓那と言う存在が、とても大きなものになっていった。
このままじゃ別れる時がつらい・・・・
そう思ったこともたくさんあった

だけど

拓那の顔を見ているとそんな考えをしている自分が恥ずかしくて、
いつしか私は拓那のことが好きになっていた。

底無し沼

拓那への気持ちはそんな感じ。好きになっていくほど、ずぶずぶと
拓那にそめられて
いつしかぬけだせなくなっている。

そんな私でも拓那の行動できらいなことがあった

それはいじめ。
拓那はいじめることを遊びと勘違いしている
そんな拓那が嫌い。
いじめることは悪くないけど
心が汚い拓那は嫌い。
拓那がそんなになってほしくない。

だから私は善者の仮面をかぶり、拓那たちにいじめられている人を助けて

拓那をいじめの輪から引き摺り下ろそうとしていた。

でもだめだった。

いくらやっても、拓那はやめてくれない。
それ以上に、私自身もいじめのターゲットになりつつある

いやだ。いじめのターゲットなんて・・・・

心でそう思っても、実際私はもう、とりかえしのつかないところまできていて、偽善者の仮面をはずすことが出来なくなっていた。

そして、一日・・また一日とすぎてゆくごとに、私へのいじめはエスカレートしていき

ついに、身体的なこともされるようになった。

苦しくて
苦しくて

悪口を言われても、言い返せない自分がもどかしくて

こんな時、拓那がいたらなぁ・・・・と思う自分が
こうなることがわかっていたのに拓那の存在を願う自分が

切なくて
ひとつ、ふたつと。涙が溢れてきた・・・・・

そんなある日。ホームルームで一人の女子が大声で私の悪口を言った。
だまって聞いているのもつらいから、教科書を読んでいると

『やめろよ・・・・そう言うことというの』

なつかしい声が、私をかばってくれる。
もしかして・・・

もしかして・・・
自分の胸が高鳴るのが分かる
私をかばう拓那にむっときたのか、違う女子が私の方を横目で見ながら言った

『拓那くんってイジメから守って、一緒に標的になれるほど、あいつの事が好きなの？』

ずぶっ
私の足が沼にはいったような感覚が襲う
大丈夫・・・きっと・・拓那は・・・・

ずぶっ
大丈夫・・・・大丈夫・・・

ずぶっ
拓那は・・・・きっと・・・

ずぼっ

『・・・オレ、そこまで苗のこと好きじゃない』

私はその後のことはあまり覚えていない
あまりにショックで、すべてを受け入れ気づいたのは放課後。図書室にいた時

分かってた

最初から分かってたはずなのに

拓那は・・・・・・

拓那は・・・・・・

私と付き合ってたのはお遊び程度だって

だから私も好きにならないって決めてたはずなのに・・・・

はまっちゃったんだ

拓那の沼に

知らない間に・・・・・・・・・・

『あっれぃ？今日の朝みんなの前でふられちゃった苗ちゃんじゃない』

くすくすと後ろから笑い声が聞こえる

振り返ると、何人かの女子が群がって、私のことを見ていた

『だから？』

強気で言い返す

『へぇー・・いつからそんな口きけるようになったの？』

ガンッと座っていた椅子を蹴り倒される、私はその場に倒れこんだ

『みじめだねぇ・・・その顔・・・アンタそのまま死ねばいいのに』

『本当だよねぇ。ねぇ苗ちゃん、死んでよ』

『というかぁ・・・アンタって生きてる意味なくない？』

次々と罵声を浴びせられる

キッと前を向いて、リーダ的存在の女を睨もうとした時

私は、本棚の影で私のことを見ている拓那と目があった

―たすけて・・・・・

私は拓那にそう伝えようとした

『どこ見てんだよッ』

肩に鈍い痛みが走る
その瞬間、拓那は走って逃げた

拓那・・・・・
ねぇ、嘘でもいいからもう一度私に好きって言ってよ・・・・

嘘だったの・・・・？

あの言葉
あの行動
あのしぐさ

すべて嘘だったの？

ねぇ・・・・・・・・・・・・・・

ねぇ・・・・・・・・・・・・・・

たくな・・・・・・・

五話　ホントウ―森拓那視点―

オレには一年前彼女がいた。

自分で言うのもなんだけど、オレはクラスの中でイケメンの分類に入っていて、周りにはいつも女子がうろついていた。

そんな環境でいたオレは、普通の女には興味がなかった。
ブス、嫌われ者、デブ
そんな分類ぼやつとは、話もしなかったし、そんな女子はみんなと一緒にイジメていた。

罪悪感はなく、むしろ、せいせいした。
ブスなやつは、ブスだから悪い
嫌われ者なやつは、嫌われて当然
デブは豚と同類
だから、イジメてもそいつらが悪い。
いつもそう、自分に言い聞かせていた

彼女もオレと一緒で、クラスの中でイケてる分類にいて
頭もよく
顔もよく
性格もよく
大和なでしこの三拍子がそろっていた。
普通なら、オレ等と一緒にイジメをするはずなのに

彼女は違った。
イジメを嫌い、イジメをしている人を憎み。
イジメられている人を助けた。

そんな彼女がクラスのイジメの標的になるのは時間の問題だった。

案の定、彼女の周りには一切友達はいなくなり
影で彼女の悪口を言いまくり
最終的には、身体的なイジメをされるようになった。

最初のほうはオレが守っていたけど
ある日のホームルームで、先生がいなくなり、彼女の悪口を言っている奴等に注意をしていた時、わざと彼女に聞こえるように女子の一人が言った

『拓那くんってイジメから守って、一緒に標的になれるほど、あいつの事が好きなの？』

オレは言葉を失った。
彼女のことは、好き
でも、イジメと一緒に戦うとなると、話は別になってくる
好きだけど、イジメと戦うほど好きじゃない
どうする？

オレは彼女のことを守ると啖呵切ってイジメの標的になるか
彼女のことを裏切り、あいつらと一緒にイジメをするか

クラスのみんなが息を飲んでオレの答えを待っている。
そして、オレは答えた

『・・・オレ、そこまで苗のこと好きじゃない』

罪悪感。この言葉が頭の中をよぎった。
オレは彼女を裏切った。変わることない真実。
なのにもかかわらず、オレはつい言ってしまった。
あの言葉を―・・・・・

「オレ、あいつがかわいそうでいままで付き合ってきたけど、オレ
最初から苗のこと好きじゃなかったんだ」

どっと声が押し寄せる。みんなオレのことわみて。
よく言ったとか
かっけー流石もりっちとか
口々に言ってくる

ふと、窓辺に座っている彼女を見る。

彼女は教科書を読んでいた。
その後もチラチラと彼女を見ていたが、かわった様子もなく。
彼女もオレのことがすきじゃなったのか？と思うようになった。

でも、オレは見てしまった
放課後、サッカーのゴールネット越しに図書室を見ると。

本を読みながら、涙をながしている彼女を・・・
オレは友達に適当な嘘をついて、彼女の元へと行った。

―さっきのあれは嘘だったんだ。オレはお前が好きだ―

そう言うつもりだったのに。
いざ図書室に入ると、さっきまでいなかったクラスの女子が彼女のことを囲んでいじめていた。
オレは本棚の影に隠れてずっと見ていた。

ふと、彼女がオレがいる本棚のほうを見て

オレと目があった。

―たすけて―

彼女の目がそう語っていた。でも、オレはその目を見たとたん、強い罪悪感に襲われ、耐え切れなくなりその場を走って逃げた。

走って

走って

走って

いくつかの階段を上っている最中気がついた

オレは悪くない。彼女が偽善者ぶるから悪いのだ・・・・と・・・・・

・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0411d/

輪廻

2010年10月8日21時51分発行